

レノックス・ロビンソン『失われた指導者』

にみる英雄復活願望

河野賢司

(1999年11月30日受理)

I はじめに

アイルランド文芸復興運動と密接なつながりをもつ〈アイルランド文芸劇場〉が創立されたのが1899年、今年はちょうど100周年にあたり、アビー劇場史の見直しも進んでいる。イエイツやグレゴリー夫人、シングの名前と業績はこの作業においてももちろん落とせないが、当劇場の支配人や演出家もつとめた劇作家レノックス・ロビンソンの名が、彼らほど日の目を見ていない感が拭えないのは残念である。私事で恐縮だが、筆者が1983年の留学時代、初めてアビー劇場で見た芝居がロビンソンの『イニシでのドラマ』¹⁾ (*Drama at Inish*) であり、メタ演劇の内容をもちながら比較的分かりやすいこの劇は筆者に演劇の魅力を教えてくれた。同時に、筆者はこの留学時に政治家パーネルに興味を持ち、パーネルがアイルランド文学に与えた影響について修論を書ければ、と考えていた。結果的にそれは力量不足で挫折したものの、教職に就いて初めて書いた紀要論文で、ジョイスとパーネルについて論じ、「パーネルの死後、実はパーネルはどこかに生存しているのだ、或いは、キリストのように甦るのだ、という民間伝説を主題とする作品が陸続として発表された」²⁾として、本論で取り上げるロビンソンの芝居『失われた指導者』も含めて、幾つかの作品名を列挙した。しかしながら、それぞれの具体的な内容の論評には踏み込む余力がなく、そのまま今日に至った。拙論はこの不備を実に15年振りに補うために書かれたものである。

II レノックス・ロビンソン『失われた指導者』

(1) レノックス・ロビンソンの伝記的事実³⁾

まず、劇作家の伝記から説明しよう。レノックス・ロビンソン (Lennox Robinson, 1886-1958) は、コーク州ダグラス (Douglas, Co. Cork) に Esmé Stuart Lennox

Robinsonとして1886年10月4日生まれ。父親が1892年、株式仲買人から Church of England の牧師に転身、厳格なプロテスタントの家系の7人兄弟の末っ子。病弱で、教育は主として家庭で受け、読書や音楽に没頭した。1907年8月、コーク市内のオペラ・ハウスでアビー座の地方公演にイエイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』を観劇して以来、家族のユニオニストへの共感から離れていき、2か月もしないうちに書いた処女作『克蘭シーの家名』は1908年にイエイツとグレゴリー夫人に採用された。1909年には2作品『十字路』と『彼の人生の教訓』が上演された。イエイツはロビンソンに年収150ポンドで劇場運営を提案し、ロンドンでショーに演劇実務に関して個人指導をしばらく受けた後、アビー劇場の運営に着手した。こうして、演出家兼支配人に1909年に就任したとき、彼はまだ23歳の若者であり、3つの戯曲が上演された作家ではあっても、演出や経営の経験はまったくなかったわけである。これは異例の大抜擢であるとも言えようし、推薦する側の度量も大きかった。イエイツの推薦の言葉は、ベルゲン・ノルウェイ劇場がイブセン（Henrik Ibsen, 1828-1906）に座付作者兼舞台監督を委任したとき、イブセンは23歳だった⁴⁾、という殺し文句だった。これにはイエイツ自身、何度も書き直しを強いられた経験から、舞台現場の知識があれば劇作に将来生かせるという配慮があったのだろう、と推測される。しかしロビンソンはイエイツに媚びることはせず、むしろイエイツ好みの詩劇からマリー（T.C.Murray, 1873-1959）やオケイシー（Sean O'Casey, 1880-1964）の批判的リアリズム演劇の方向へ舵取りした。この船出は必ずしも順風満帆な展開ではなく、1910年春、自作『収穫』⁵⁾の上演に際しては、アイルランドの農村生活を苛酷に描いたとして批判された。また5月7日のエドワード7世の急死に際して、不幸な事情⁶⁾も重なって劇場をあえて閉鎖しなかったために、英国人パトロンのホーニマン女史⁷⁾（Annie Elizabeth Fredericka Horniman, 1860-1937）の逆鱗に触れて財政支援を失うなど、経営者としての不手際もあったが、イエイツの庇護で即時解雇は免れ、1911年から12年にはアビー劇団のアメリカ公演にグレゴリー夫人とともに出かけ、この公演は財政的にも大成功を収めた。1912年後半に、自作の3つの政治劇のひとつ、『愛国者たち』を演出した。1914年には3回目のアメリカ公演を果たしたが、グレゴリー夫人の圧力で、演出家兼支配人の職を辞した。

その後の4年間の解任期間、いわば不本意にリストラされた時期は劇作家としてのロビンソンには、むしろ実り多い時期となった。残りの2つの政治劇『夢想家たち』（1915）と、本論で取り上げる『失われた指導者⁸⁾』（1918）、および自伝小説『南から来た青年』（1917）、さらには真骨頂とも評される喜劇『お気に入り』（1916）を書き、ダブリン演劇連盟（Dublin Drama League）を設立した。こうして1919年、グレゴリ

一夫人はあまり乗り気でなかったが、イエイツはロビンソンをアビー劇場のかつての職に呼び戻し、1923年にはシングの死去（1909）以後、欠員不補充だった理事会に加わり、1958年10月14日に亡くなって聖パトリック寺院に埋葬されるまで終生アビー劇場との絆を保った。（なお、1931年9月8日、まもなく45歳という時期に Dorothy Travers Smith と結婚したが、こどもはもうけなかった。）

(2) 『失われた指導者』の梗概

次に作品の梗概を詳細に述べよう。

初演は1918年2月19日、まだ第1次大戦中（終結は同年11月11日）である。演出と主演のルーシアス役を Fred O'Donovan が担当した。

第1幕は1917年10月の夕刻、プルモア（Poulmore）のホテルの喫煙室。第2幕は翌日の午後の同じ場所。第3幕はその夕方の、ノックパトリック（Knockpatrick）の立石（メンヒル）の遺跡。ほぼ1日の出来事がほぼ同一場所で一貫した筋で展開される点で、アリストテレスの三一致原則を忠実に遵守する劇作である。

プルモア（架空の地名と推測される）に到着するには、ダブリンから鉄道で数時間と2度の乗換えが必要で、さらに駅からフォード車で2つの険しい丘を越えて1時間ほどかかる。現ホテルの住居は連合法の年（1800年）に曾祖父ジョン・レニハンが資材を自給自足で賄って建築したものだった。良家の教育ある娘と彼は結婚し、2人の息子をもうけた。長男は1847年に危険な真似をし、アメリカで49年に死去、次男が土地を相続した。この次男（祖父）も1860年に2男1女を残して他界。次男は渡米（この次男が、主人公のルーシアスらしい）、娘は尼僧となり、長男（父）ウィリアムが土地を受け継いだ。結婚後2年で妻に先立たれ、彼自身も10年前（1907）に死去。ホテル経営を取り仕切っているのは、当年37歳の一人娘のメアリーである。

釣りのシーズンも終りに近付き、宿泊客もわずか。喫煙室にいるのはコーク生まれの28歳のジャーナリストのオーガスタス・スミス（Augustus Smith）一人で、手元の道路地図と壁の地図とを見比べている。彼は明日行われる2つの政治集会の両方を梯子取材できれば、と目論んでおり、メアリーの叔父ルーシアス（Lucius）に車の手配を依頼する。入ってきたメアリーにスミスはこの土地の政治状況を質問するが、メアリーは政治には全く関心がないと言い切る。やがて2人の泊まり客が釣りから戻ってくる。50歳で医者のパウエル・ハーパー（Powell-Harper）と、その友人で40歳前のフランク・オームズビー（Frank Ormsby）である。フランクはスミスに葉巻を勧め、3人の世間話が始まる。パウエル・ハーパーは今日で言えば、催眠療法を用いる精神分析医であり、マギーという女性の湾曲した背骨を催眠術で治療した事例をめぐって、

ほかならぬスミスの勤務する新聞社が、偽医者弾劾キャンペーンの論陣を張った経緯をスミスは思い出す。しかし化けの皮を剥ぐために派遣された、スミスの同僚記者ラドフォードは最後にはこの医者の治療法にはまったく問題がないと確信しただけでなく、パウエル・ハーパーを擁護する姿勢をとり、いわばミイラ取りがミイラになったようだ。

スミスはなおも医者に、フロイト心理学⁹⁾について質問する。フロイト学説によれば、人間は言葉や思考を検閲し、心の中に抑制された領域をもつが、夢のなかではその検閲をかいぐり、禁断の領域に入る。例えば性交渉がうまくいかないと背骨の湾曲につながったりするように、ある種の病気は精神的な原点をもつのでは、と。パウエル・ハーパーは、戦争神経症のように大抵の場合は原因がいたって明確である、と答える。そこへ再び、ルーシアスが毛針をもって登場。医者は、当初からこの老人に、なにかしらただならぬ気配を感じていたが、彼と長年親しいフランクはそれを否定する。(彼は24年前の1893年秋に父親と徒歩旅行して道に迷い、深夜にウィリアム一家の農家に世話になったのが機縁で父親同士が親しくなり、毎年秋にこの土地を訪れるようになった。当時、一家には父親ウィリアムと娘のメアリー、アメリカ帰りのルーシアスの3人がいた。)催眠術に興味を抱くスミスは、最近不眠症なので自分に催眠術をかけてくれと、医者頼む。医者の言葉の暗示にかかってスミスはまどろみかけるが、気がつくと、そばに居合わせたルーシアスがすっかり催眠術にかかっていた。術から覚めた後も熟睡できるようにと、彼が最近うなされる悪夢の正体を語らせると、ルーシアスは「棺」「女」「偽りの友人」、そして最後に「自分の名前」の夢だと告げ、自分の名前はチャールズ・スチュワート・パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-91) だ、と語る。固定観念に取りつかれた狂人のたわごととスミスは決めつけるが、医者はこの告白が真実である可能性を探り、パーネルの没年を確認するためにメアリーを呼び、書棚のパーネルの伝記を持ってくるように頼むが、メアリーは、伝記などないし、没年は93年だと嘘をつく。医者は、術中の記憶を消すように指示してルーシアスの催眠術を解き、平静を装う。やがて立ち去ろうとする彼の背中に医者は突然、Mr. Parnell! と2度呼び掛ける。するとルーシアスの目は輝き、態度が別人のように豹変し、退場する。これを目撃したスミスは特ダネとばかりに興奮し、記事の見出しを「失われた指導者」と決める。

2幕は翌日の午後4時。スミスが本社へ記事を送信したらしく、宿泊問い合わせの夥しい電報がホテルに舞い込んでいる。女中のケイト (Kate Buckley) は、新たにやってくる予定の宿泊客のための簡易ベッドを準備し、町の名士 (治安判事) のクーニー (Peter Cooney) も1時間前からルーシアスの帰りを待っているが、しびれを切ら

して一旦引き上げる。やがてメアリーとパウエル・ハーパーが戻る。昨夜の出来事を聞いたメアリーは、医者に真相を思いきって告白する。子供の頃から叔父は気が触れていて、自分をパーネルだと思い込んでいたこと、パーネルの死後正気に戻ったので施設を出てウィリアム家にやってきたが、昼間は自室に閉じこもり、夜になると徘徊したこと、父親から叔父の世話を任され、政治やパーネルの話は避ける、と約束したこと、2、3年前にシン・フェイン党員たちが村にやってきてから様子が再びおかしくなったことなどを語る。パウエル・ハーパーはメアリーもまた父親から騙されていて、実際、ルーシアスがパーネルである可能性の有無に思いをめぐらす。女中がルーシアスとの面会希望者がいること、いましがた当のルーシアスとスミスが帰宅したことを告げる。やがてその2人が登場。ルーシアスは10歳若返って見え、背筋もしゃんと伸びている。騒動が起きる前に避難を勧めるメアリーに、ルーシアスは自分が本当にパーネルであること、メアリーの父親の援助で、臨死状態にあった棺から抜け出し、名もないロシア人移民の死体が代わりに収められたこと、父親の実弟はアメリカで死亡し、自分はその身代わりとなったことを話すが、メアリーは容易には信じられない。パウエル・ハーパーも同様で、首実験で本人と確認されるまではルーシアスの話を受け入れない。一方スミスは、この村でかつてパーネルと個人的に面識のあるバラッド歌手（現在は盲目）と連絡をつけ、確認に来てもらう手筈を整えている。治安判事クニーが再度訪ねてくる。また、郵便局長の妻をもつクランシーも様子を窺いに来る。電報文の内容を夫に漏らしたのを女中が立ち聞きして言い触らしたため、この噂はすでに村中に広まりつつある。しかもクランシーは〈アイルランド統一連合 (UIL)〉の書記長であり、早速スミスは彼に、パーネル生存が事実の場合、連合としての対応策を質問するが、優柔不断な彼はただ困惑するばかり。さらに、殺到する電文をさばききれずに、妻が郵便局を閉めて寝込んでしまったという知らせを女中から聞き、自分も家に帰ると言い出す。そこへ〈ユニオニスト〉を自称し、同じく治安判事でもあるジョン・ホワイト少佐 (Major John White) も噂を聞きつけてやって来る。彼はパーネルが本物かどうかを吟味すべく尋問表まで用意している。続いて〈シン・フェイン党〉員のマイケル・オコナー (Michael O'Connor) も顔を見せ、アイルランド3大政党の代表者が揃う。やがてルーシアスとメアリーが帰宅。ルーシアスは、しばらく休養して2時間後にノックパトリックの立石遺跡で会う約束を威圧的に取りつけるが、そこへ盲人のバラッド歌手トマス・フーリハン老人が登場。フーリハンはルーシアスの掌や顔を触るうちに、この人はパーネルだと確信し、狂信的にひざまづく。メアリーは、判断は神様に委ねるとしながらも、叔父がパーネルであるという信念に傾く。

3幕は夕暮れ時のノックパトリックの立石遺跡。小高い丘に2メートルほどの石が

2つある。パウエル・ハーパーがパイプで煙草をすっていると、釣りを終えたフランクが登場。村がジャーナリスト連中に占拠され騒がしいことやメアリーの将来を嘆く。実はフランクは昔からメアリーが好きで結婚を申し込みたかったのだが、決断できずにきたのだった。やがてルーシアス、メアリー、フリーハン老人が姿を現す。続いてマイケルと2人の若い友人が上って来る。彼らはハーリングの試合帰りで、フリーハンはスティックをマイケルから貸して貰って、パーネル復活を称えるバラッドを歌う。スミスとクーニーも登場。さらに少佐と克蘭シー、そしてロング・ジョン・フレイヴァン (Long John Flavin) たちも到着。ルーシアスはこの日和見主義のロング・ジョンを悪党呼ばわりしてあからさまな嫌悪を示し、彼の方も挑発的な態度をとる。パーネルとじかに面識のある人間はこの場にはいないので、やがてパーネルの知己が到着するまで、将来の話をしようとルーシアスは誘う。UILの克蘭シー、ユニオニストの少佐、シン・フェインのマイケルたちがそれぞれパーネル失脚の経緯に関して自己弁護し、今後の自党復帰を訴える。しかしルーシアスは逆に彼らこそ自分に加わるべきであり、独立でも自治でも土地でも金でもなく、魂を人々に提供すると言う。いまや暖かい臘のように、一つの国民の精神が新たに鑄造されようとしている千載一遇の時だ。運動は文字通り、動くからこそ運動であって、たえず目的や戦術を変えねばならない。たしかに80年代には〈衣食足りて礼節を知る〉で、物質的満足を求めたが、地主や政府相手の、土地を求める闘いではなく、下劣な自我との闘い、国民的魂を求める精神的闘いこそが大事なのだ。物質的勝利などはたやすいことで、半年で達成可能な単純な解決策がある。しかし、より大きな勝利のためには、国家を信じること、敵を理解しようとする寛容さ、議会や共和国よりも気高い精神性を持つべきであり、そのためには、愛されると同時に恐れられる指導的人格者が国民に語りかけさえすればよい。そして自分がその任に耐えうるかどうか悩んだが、神のお告げのように暗闇から声が聞こえた¹⁰⁾からこそ、こうして蘇ったのだ、とルーシアスは雄弁をふるって訴える。こうした話に少佐やマイケルはいたく感銘を受けるが、ロング・ジョンだけはルーシアスに悪態をつく。それに激昂したフリーハンは制止の手を振りほどき、持っていたスティックでロング・ジョンに殴りかかる。しかし彼は、止めに入ったルーシアスを殴打してしまい、即死させてしまう。おりしもパーネルの知己がようやく車に乗って到着するが、ルーシアスの遺体を眺めた彼にしても、〈パーネルに良く似ている〉以上の確言はできない。真相不明のままでよかったのかも知れない、と医者は呟き、その場の全員がひざまづいて祈りを捧げる。突風が吹きだし、俄雨となるが、ランプの照明¹¹⁾が遺体の巖かで安らかな表情を照らし出す。

(3) 標題の意味

さて、標題の「失われた指導者」The Lost Leader はやや説明を要する。この言葉は、1幕の最後で、パーネル生存の可能性を信じたスミスが、送信する新聞記事の見出しとして考えついたもので、医者提案した「この世に蘇りし」よりも優れた標題だということ。だが、生存確認の一報であればむしろ、「発見された指導者」「生き延びていた指導者」あたりが妥当なところであり、「失われた指導者」という表現は〈失脚〉は表せても、〈復活〉を示唆するには必ずしも適切とはいえないだろう。そこで問題となるのが、3幕はじめの次の場面である。

フランク ぜひともしよう、結婚を彼女に申し込むんだ——しかし、この台詞は彼女が大人になってからというもの、長年ずっと心の中だけで言い続けてきた台詞なんだ。いつだって、また次の機会に先送りするちゃんとした理由があるように思えてね。そうこうしているうちに二人とも、とうがたちはじめている始末だ。

パウエル・ハーパー 「立像と胸像」だな！

フランク なんの立像だって？

パウエル・ハーパー なんでもない。ブラウニングのことを考えていたのさ。多分、スミス君のお陰でね。(53)

「立像と胸像」(The Statue and the Bust, 1855)は、ブラウニング(Robert Browning, 1812-89)の詩集『男と女』(Men and Women)に収められた詩¹²⁾で、フィレンツィエのアヌンツィアータ広場(Piazza dell' Annunziata)にある銅像に基づいている。Ferdinando de' Mediciの愛する人妻が夫に監禁されたのを悲しみ、監禁室を眺めることのできる場所に自分の騎馬像を建立して、心を慰めたという。フランクが優柔不断で愛情を告白できずにきた経緯を聞いて、医者がこのブラウニングの「立像と胸像」の物語を偶然に連想したのは納得できるとしても、それがなぜ「スミスのお陰」なのかは判然としない。なぜなら、全編を通して、スミスの台詞の中には直接ブラウニングと結びつくものはないからである。だたひとつ、考えられるとすれば、他でもない、この「失われた指導者」という表現である。そして実際、ブラウニングの詩の中には同名の「失われた指導者」という詩がある。[さらに言えば、この詩の姉妹編¹³⁾(companion piece)として書かれた詩が「愛国者」¹⁴⁾(The Patriot)であり、ロビンソンの戯曲には『愛国者たち』という酷似する標題の戯曲もあることはすでに見た通り。]

さて、ブラウニングの問題の詩は、詩人ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)が桂冠詩人の職(1843-50)をあっさり引き受けてしまったことへの憤怒に満ち

ている。当時ワーズワース73歳，ブラウニング31歳。シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）の影響を受けた若い詩人にとってはワーズワースが桂冠詩人となることは，体制側に取り込まれる「変節」（apostasy）と思われたのだろう。（後になって詩人はこれを若気の至りの非難として後悔しているが。）ワーズワースの方ではこの詩を読んだ形跡はないし，読んだとしてもまさか自分が非難の対象だとは気付かなかっただろうという¹⁵⁾。しかし，ブラウニングの生涯においてこの作品が注目されるのは，ある評伝のなかで，「詩人としての彼は，それら [=政治上の意見] が自分の詩では場所違ひだといふ暗々裡の信条をもつてゐて，それを破るといふことは稀であつた。従つてその少数の例外は，それだけ一層注意に値する」¹⁶⁾として挙げられるほど，稀有な政治的な詩の一つだからである。彼の言う「失われた指導者」とは，自由主義から転向することで詩人の期待を裏切ったワーズワースであり，一方のロビンソンの戯曲『失われた指導者』は，アイルランド独立運動において国民の信頼を裏切ったパーネルを扱うという点では共通している。もちろんパーネルは名誉や金で体制側に取り込まれたのでもなければ，指導者としての立場を進んで放棄したわけでもなく，ただ不倫訴訟事件でカトリック教会や党员を含む民衆の支持を失って失脚したのであり，「変節」の中身や事情は大いに異なる。だが，熱烈な信奉者・崇拜者たちにとっては，寄せていた全幅の信頼感を裏切られたという思いがあったことは否定できないだろう。以下に，ブラウニングの批判のこめられた全詩を訳出する¹⁷⁾。

一握りの銀貨のために彼はわれわれを捨てた
 上着にさす一本のリボンのために——
 運命が我々から奪った唯一の贈物を見つけ
 運命が我々に捧げさせるすべての他のものを失った
 彼らは，与える金貨があり，彼に銀貨を施したのだ
 ほとんど与えない輩の持ち物はものすごかった
 いかに我々の銅貨が彼の奉職のために消えたことだろう！
 ほろ切れでも——紫色であれば，彼の心は誇らかだった！
 彼をあれほど愛した我々は，彼を信奉し，賞賛し，
 彼の穏やかで荘厳な瞳の中に生き
 彼の素晴らしい言葉を学び，彼の明晰なアクセントをとらえ
 彼を自らの生と死の鑑にしたてあげていたというのに！
 シェイクスピアは我々の仲間，ミルトンは我々のためのもの，
 バーンズやシェリーは我々の同輩だった——いまや草葉の陰から我々を見つめている！

ひとり彼だけが前衛や自由から身を離し
彼だけが背後や奴隷たちの方に落ちていく！

我々は堂々と行進しよう——彼の臨席によってでなく
歌が我々を鼓舞するだろう——彼の叙情詩の歌ではなく
行為はなされるだろう——他の者たちには高く聳えることを求めた彼が、
自らの静穏を自慢し、縮こまることを命令する間は。
彼の名前を消し去り、それから、さらなる失われた魂を記録せよ
さらなる仕事が拒絶され、さらなる小道が人跡未踏で
悪魔にはさらなる勝利、天使にはさらなる悲しみ
人間にはさらなる悪行、神にはさらなる侮辱！
人生の夜が始まる 決して彼を我々のほうへ戻って来させるな！
われわれに側には疑惑や躊躇、苦痛、無理な賞賛——薄暮の薄明りがあるだろうが——
嬉しく自信に溢れる朝は二度と来ないだろう！
立派に闘い続けるのが最善だ——われわれは彼に教えたのだから——雄々しく 攻めろと
彼の心臓を我々が支配する前に、我々の心臓を危険にさらし
それから彼に新しい知識を受けさせ、我々を待たせよう
天国で許しを受けし、玉座の側の最初の者！

もうひとつ指摘しておきたいのは、2つの「失われた指導者」は刊行年では75年の開きがあるものの、ブラウニングの死んだ1889年12月12日とパーネルの死んだ1891年10月6日はわずか2年たらずの懸隔であり、前者が雨中の散歩による風邪がこうじた気管支炎と心臓機能障害、後者もやはり雨中の演説による風邪がもとのリウマチ熱が死因とされることも、劇作家ロビンソンの意識にあったかも知れない。もちろん、ブラウニング詩の標題との一致や没年の近接を指摘するだけでは、最初の問題提起——なぜ「見いだされた指導者」でなく、「失われた指導者」なのか？——に対する十全な解答にはならない訳だが、崇拜者への裏切りの点でワーズワースとパーネルが同じ位相で把握された可能性を示唆することは無益ではないはずである。

この点に関して、本稿口頭発表後の質疑応答で、中央大学の松村賢一先生から、The Lost Generation の訳語「失われた世代」が不適切なように、「失われた指導者」には違和感がある、ここでは文脈から推して〈(さ)迷える〉指導者、〈迷い出た〉指導者、の意ではないか、との貴重なご指摘を頂いた。〈(さ)迷える〉は、尾島庄太郎訳の〈救われぬ〉に近い解釈で、たしかにこの訳語を当てれば標題と戯曲内容との齟齬はあま

り感じられなくなる。しかし、死後も成仏できない・浮かばれない、という仏教的ニュアンスがはたして‘lost’で含意可能なのか、筆者には未だ判断がつかかね、また、その場合には、新聞記者スミスがパーネル生存を本当に確信したのか、すこぶる曖昧になる気がする。『愛国者たち』に見られるように、ロビンソン劇には標題と内容の乖離があることも混乱の要因になる。また、The Lost Generation の由来は、ヘミングウェイの『日はまた昇る』のガートルード・スタインのエピグラフからだとか、『移動祝祭日』にあるように、フランスの自動車修理工場の親方が怠け者の修理工を罵った言葉‘génération perdue’を同じくガートルード・スタインが英訳したものから、という説もある。後者を採れば、フランス語の perdu には「身を持ち崩した、墮落した」（例えば、‘fille perdue’で「売春婦」）の意味もあり、〈生き方を見失った〉世代とは、元来は随分かけはなれた蔑視語だった可能性もあり、たとえそうでなくとも、「失われた世代」ではたしかに隔靴搔痒の感が否めない。筆者は暫定的に、「(アイルランド国民が) 失った指導者」の意味と解釈して直訳を充てたのだが、はなはだ心もとない。標題の解釈について大方のご教示を請う次第である。

(4) 作品の主題と評価について

この芝居の主題は明快である。端的に言えば、アイルランド民衆の英雄復活願望が主題である。1916年4月の復活祭蜂起が鎮圧され、独立への道程が暗礁に乗り上げた1918年にあつて、余人をもっては代えがたい指導力を持った政治家パーネルの再登場を期待する人々の無意識の願望が、信じがたい噂を死後も膨らませ、3幕ではおそらく一部の観客を洗脳するほどの信憑性をもって、ルーシアス＝パーネルのイメージを増殖させたことだろう。さらに個人的レベルから言えば、英雄変身願望、あるいは精神分析でいうところの「妄想」を持つ者の悲喜劇であろう。昨今、『24人のミリガン』(First Person Plural) に見られるような多重人格、あるいは「解離性同一性障害」と診断される症状への社会的な関心が高まっている。多重人格者ではないものの、客観的に見て、ルーシアス老人はひとりの精神病患者であり、精神に破綻をきたしたある老人の妄想と、それに翻弄される周囲の人々の滑稽さがこの劇のモチーフになっている。ただし、ロビンソンが巧妙なのは、我々は実際、社会的著名人（あるいは、無名人でもよい）とは面識がないことがほとんどであり、老人の発言の真偽を確かめる術を持ち合わせていない現実を利用している点である。もっと言えば、ある人がたしかにその人なのか、というアイデンティティの問題に関しては、社会通念や惰性で、そうに違いない、と当て込んでいるだけで、実際には深い吟味や洞察を働かせてはいない。政治動向を知るのにも、活字信仰と呼んでよいような従順さで新聞報道を鵜呑み

にしている傾向があるだろう。ちょうど2幕でクーニーが言うように、「しかし冗談じゃないに、人間は活字で見るものなら何だって信じてしまうのは変な話じゃないかね?」「死んで埋められたずっと後も、人間は活字を信じるものなんだ。」(39)言い換えれば、面識という実体験が稀薄な社会では、活字が権力を握って一人歩きする。ルーシアス老人の荒唐無稽な主張を周囲が制圧できないのは、誰も実際にはパーネルを見たことがないからであり、〈パーネル〉はこの辺鄙な農村にあってはひとつの象徴や標識の活字なのである。パーネルが死んだとき5歳だった劇作家ロビンソン自身が、おそらくパーネルをこうして象徴化された形式でのみ把握していたことだろう。皮肉なのは、盲目のバラッド歌手が手で直に触っていないながら、その判断を致命的に誤ってしまっていることで、人間の視覚ばかりか、触覚まで信頼できないことを示唆している。

さて初演当時、イエイツは『失われた指導者』を高く評価して、「貴君の劇は非常に注目すべきもので、たぶんこれまでで最高です」と激賞、グレゴリー夫人にも以下のように感想を送っていることが指摘されている。

ロビンソンが今とても良い劇を送ってきました。パーネルが戻ったらという、あなたの昔の主題です。優れた劇に近づくのですが、そうなりません。あなたに送る前に一、二変更をアドバイスをします。(Michael J. O'Neill, *Lennox Robinson*, Twayne Publishers, 1964, p.67.)

あなたのロビンソン劇の批評に賛成です。あなたがこの主題を扱うことができたらと思いました。彼のパーネルは初稿ではもっとまづかったのです。私はパーネルがプランを持つように直させました。元のパーネルはセンチメンタルな善意しかないように思えました。¹⁸⁾

このやりとりを受けて前波清一氏は、以下のようにこの劇を論評する。

当時の政治の季節を反映する切実なテーマも、パーネルをめぐる「神話作り」の悲喜劇も、「指導者」のあまりの空虚さで生きない。イエイツの提案によるらしい、国民に「精神性」を与えるという老人の弁舌は、別人の感を与えてしまう。¹⁹⁾

つまりルーシアス老人の個性の空虚さ、パーネルとは別人の印象を抱かせるような大演説がこの劇の欠点であるという指摘である。パーネルらしさが伝わらない点は、イエイツ提案をいれて改稿したロビンソンの脚本の弱さのせいかもしれないが、役者の技量にも関係するだろう。ロビンソンの自伝では、「我々アイルランド人は1917年か

ら21年の間は、イングランドでは余り人気がありませんでした」と記し、それでも、1917年(ママ)の『失われた指導者』のロンドン公演は、主人公を演じた Norman McKinnell と演出の J.B.Fagan のお陰で、素晴らしいものになったと振り返っている²⁰⁾。この自伝では、Fred O'Donovan が演出兼主人公を演じたダブリン公演の言及はなく、もしかすると演出を自ら担当できなかったロビンソンの目には満足できない上演だった可能性がある。テキストを読む限りでは、幕が進むにつれてやや重苦しい深刻さが漂ってくるのだが、演出において、ルーシアスを悲劇的人物とするか、喜劇的人物にするかで、相当に雰囲気が変わってくる。いみじくも、登場人物のスミスがこのパーネル騒動を次のように言う。

スミス でも状況を考えて下さいよ。あらゆるものが揃っている、喜劇あり、悲劇あり、メロドラマあり、なんでもありです。もしこれを芝居として書くとすれば、悲劇にしますか、それとも大笑いの笑劇にしますか？ (38)

フラン・オブライエン (Flann O'Brien, 1911-66) の小説『ドーキー古文書』(*The Dalkey Archive*, 1964) では、1941年に死んだはずのジョイスが、ゲシュタポの危険を免れるために死んだとみせかけてアイルランドに密かに舞い戻っており、やや頭がおかしくなっているという設定である。明らかにこの小説では「大笑いの笑劇」路線をオブライエンは選択しているが、『失われた指導者』がそうできないのは、ルーシアス老人を笑い飛ばすことは、パーネルは生きているという、アイルランド人の意識下の信仰を笑い飛ばすことと同義であり、それは自分を鞭打つ自虐行為だからである。

(5) 神話化の経緯

ではなぜパーネルが死後も生存しているという伝説や神話化がなされたのか。自らも劇作家である伝記作家アーヴィン (St. John Ervine, 1883-1971) はその著『パーネル』²¹⁾のなかでつぎのような具体的事実を挙げている。

①パーネルの死の1週間前の9月30日にフランスの軍人ブーランジェ将軍 (General Georges Boulanger, 1837-91) が、逃亡先のブリュッセルにある、愛人の Madame de Bounemains の墓で銃による自殺を遂げたことがあり、パーネルの死もロマンチックな自殺だったのではないかという憶測がロンドンに流れたこと。

②アーヴィンがベルファーストで過ごした少年時代、ブール戦争 (the Boer War, 1899-1902) で活躍したブール人のデヴェット将軍²²⁾ (General Christiaan Rudolph

De Wet, 1854-1922) が実はパーネルだと聞かされたことがあること。

③パーネルの遺体を収めた棺が、肩部のない中世風の特異な棺だったこと。

④異常高熱を伴うリューマチ熱が死因であると主治医の Dr. Jowers が診断しているが、そのために死後にすぐ棺が封鎖されてしまい、友人はおろか5歳上の姉の Mrs. Dickinson ですら、棺のなかの遺体と対面することが許されなかったこと。

①は復活とは無縁だが、自殺の誤報が流布するからには、生存の流言が同時に発生することもありえただろう。②はジョイスの『ユリシーズ』²³⁾でも言及される有名な噂である。③は、ドラキュラなどのゴシック小説風の連想を生んだのかも知れない。しかし、棺のなかの遺体を見た者が少ないという、④番目の事情がとくに大きく影響しているものと推測される。

また、⑤番目を追加するなら、10月11日にダブリンで行われた葬儀の際に、流れ星が目撃されたことも伝説作りに寄与しているだろう。ダンシンク測候所 (the Dunsink Observatory) の観測では「木星よりもはるかに大きくて明るい」青白い隕石が夕方6時30分に4秒間にわたってアイルランド各地で観測され、「稲妻の閃光のように空を明るくし」と記録されているという²⁴⁾。この流れ星証言は、詩人キャサリン・タイナン²⁵⁾ (Katharine Tynan, 1861-1931)、モード・ゴン²⁶⁾ (Maud Gonne, 1865-1953)、ユーリック・オコナー²⁷⁾ (Ulick O'Connor) も記している。こうした事象が伝説形成の一因となったことは確実だが、伝説化の原動力は、言うまでもなく、アイルランドの人々の強い英雄復活信仰に他ならない。

III パーネルを主題とする他の演劇作品

パーネルの主題を舞台で扱うのはロビンソンが初めてではないし、ロビンソン以後もパーネル劇は上演されてきた。この章では、そうした他の演劇作品を紹介することで、『失われた指導者』の特色を考えてみたい。

(1) グレゴリー夫人の『解放者』(The Deliverer)

1911年1月12日初演のグレゴリー夫人の一幕物の『解放者』(The Deliverer)²⁸⁾では舞台はエジプトのナイル川の Inver に設定され、パーネル復活伝説は「出エジプト」という寓喩的手法によって舞台化されている。この芝居では、アイルランド人風の名前²⁹⁾をもつ3人のヘブライ人の男アード、ダン、マラキーが人足として奴隷労働を強いられている。食事時となり、それぞれの女房が乏しい食事を持ってくる。国王の秘蔵つ

子 (The King's Nurseling) はちょうどその場に居合わせたのだが、執事 (Stewart) が、彼のことを両親がどこの馬の骨とも知れぬならず者と侮辱するのを聞きつけ、ハーリング・スティックの一撃で首の骨を折って殺してしまう。自分が本当は3人の貧民と同じ民族に属することを知って、彼はエジプトを船で脱出する計画を立てる。女房たちは彼を絶賛するが、それが男衆には気に入らず、果たして本当に脱出に導く能力があるのか疑問を抱くようになる。やがて3人と同じようにみすぼらしい服装に着替えて彼は登場。これはもちろん、人目を避けて逃走するために必要な行動なのだが、自分たちを嘲笑するためだとか、スパイに来たのだと曲解し、アードとガンは彼に従うことを拒絶するばかりか、二人で殴り合いの喧嘩になる。〈秘蔵っ子〉はその喧嘩を仲裁するが、「国王が逃走の邪魔立てをするならナイルを血で染め、エジプト中の家の戸口に喪章を巻かせよう」という過激な発言に女房連中が猛反発し、石を投げつける。そこへ〈秘蔵っ子〉を探しに役人 (Officer) が登場するが、変装にはまったく気が付かず、役人は彼を蹴飛ばして去る。この後、〈秘蔵っ子〉はうなだれて身動きしない。3人は彼のもとへ近寄るが、どうやら死んでしまったらしい。彼らは身元が割れないように、国王が飼っている猫どもの餌食にさせようと、遺体を引きずって行く。猫の泣き声を聞きつけて役人が戻ってきて、(死体には気付かないまま)兵士に命じて彼らに手錠をかけさせて連行させる。3人のそばを血まみれの〈秘蔵っ子〉がゆっくりと通過して行く。その姿は亡霊のようでも天使³⁰⁾のようでもある。

この劇についてグレゴリー夫人自らがつけた注釈³¹⁾によれば、ゴールウェイ湾に面するスピダルという村のお祭りで、ある老人がアイルランド語で「彼は生きている、彼は生きている」と、身振り豊かに声を高めて繰り返していたので、何のことかと聞くとパーネルがまだ生きている、との返事。そして見張りの警官も曰く、「多くの人々がそう言います。結局のところ、埋葬された遺体を見た者は誰もいないのですから」。そして夫人はパーネルの写真の裏に、古いバラッドの一節「ひとりの死者が戦に勝つを見た／そしてその男とは自分だったと思う！」を書きつけていたという。

『失われた指導者』との関連で注目すべきは、凶器として使われるハーリング・スティックの存在である。この劇では指導者たるべき「王の秘蔵っ子」が執事を殴り殺し、『失われた指導者』では当の指導者が崇拜者から誤って殴り殺されるという点で、主客が逆転するものの、殺人のための大事な小道具として、ロビンソンがグレゴリー夫人から拝借した可能性は高いだろう。

1910年代には他にもパーネル関係で指摘する事柄がある。1つは、ロビンソンの『失われた指導者』初演のわずか5か月前、1917年9月24日にやはりアビー劇場で、シェイマス・オケリー (Seumas O'Kelly, 1875-1918) の『パーネル派』 (*The Parnellite*)

という3幕物が上演されている³²⁾こと。これはプロパガンダ色の濃い作品とされるが、筆者はテキストを未見なのでこれについての論評は控えよう。また、1916年にはジョージ・ムーア (George Moore, 1852-1933) の小説 *The Brook Kerith* が出版されており、この作品ではキリストが実は死なずに隠れている設定になっているという³³⁾。

パーネルを題材とする劇作品はその後、1930年代半ばになって登場する。ロビンソン自身がアビー劇場で演出に当たったという点で注目には値するのは、フィアロン (William Robert Fearon) の『エイヴォンデイルのパーネル』 (*Parnell of Avondale*, 1934)³⁴⁾である。英国上演が先行したショフラー (Elsie T. Shauffler) 作の『パーネル』 (*Parnell*, 1936)³⁵⁾と同様に、キャサリン・オシェイとパーネルの悲恋のロマンスを軸に、政治状況も織り込み、パーネル晩年の評伝に力点が置かれている。両作品ともにパーネルの臨終で幕が降りることから、復活や再来の暗示はまったくない。つまりパーネルという生身の人間像を浮き彫りにすることが主眼であり、死後の神話化の企てはない。ショフラーの『パーネル』では、劇的效果を狙って、その死を委員会評決後の当夜 (1890年) に早めるなど、史実に手を加えることもしている。一方、小説家フランク・オコナー (Frank O'Connor, 1903-66) とヒュー・ハント (Hugh Hunt, 1911-) の合作になる戯曲『モーゼの岩』 (*Moses' Rock*, 1938)³⁶⁾は、パーネルの失脚が地元選挙区のコーク市民に与えた影響を描くもので、登場人物ビディは、葬儀翌日の段階で〈パーネル死せず〉の台詞を漏らしており、英雄復活神話の端緒を描く作品と呼べるかもしれない。

(2) フィアロンの『エイヴォンデイルのパーネル』(3幕全12場)

1934年10月2日、アビー劇場で初演。翌年10月にも同じ劇場でヒュー・ハント演出で再演されたフィアロンの『エイヴォンデイルのパーネル』の梗概を紹介しよう。

1幕1場は1880年4月14日、ロンドン郊外のエルサム (Eltham) にあるケイト・オシェイの家。ウィリアム・オシェイ大尉 (Captain William O'Shea) とオゴーマン・マーン (Colonel O'Gorman Mahon) 大佐は揃って議員当選を果たし、ケイトの家を訪ねて、彼女や姉アナ (Anna) とともに祝杯をあげる。しかしかかった莫大な選挙費用は妻に負担を懇願する始末。ケイトは、パーネルが手紙の返事も寄越さないこと、延々と演説を続けての議事引き延ばし戦術の無益さを語る。2場は8か月後の12月17日の同じ場所。女中を下がらせ、姉も就寝した深夜にパーネルが来訪。逮捕状が出され、逃亡中の身のパーネルをケイトは空き部屋に匿うことにするが、女中エレンに見つかり、口止めする。3場は7年が経過した1887年4月18日正午の同じ場所。ケイトとパーネルはすっかり親しくなり、互いに 'my king', 'Queenie' と呼びあう仲になり、

ケイトは新聞記事を伝える秘書役をこなしている。土地同盟の闘士ダヴィット (Michael Davitt, 1846-1906) と会うために出かけようとした矢先に、『タイムズ』紙にテロ事件を擁護するパーネル直筆書簡が掲載されているのを知る。いわゆるピゴット捏造文書である。パーネル外出後、オシェイ大尉がかけつけ、パーネルの私物が家にあるのを見つけて妻の不貞を責めるが、ケイトも夫の不実を盾にとってに一步も譲らない。二人はずっと別居の関係にある。

2幕1場は1889年3月1日の下院の控え室。ピゴットの自殺によって捏造文書の嫌疑が晴れたパーネルを迎える大勢の議員たちが集まっている。しかし嫉妬に駆られたオシェイ大尉は、ある英国人議員に、姦通を理由に離婚訴訟を起こしてパーネルを破滅させる計画を語るが、相手は思いとどまらせようとする。2場は1890年11月10日、ブライトンのケイトの家。夜に姉のアナが訪ねてきて、パーネルとの関係を断てば離婚訴訟をオシェイ大尉が取り下げる、と説得するものの、これを拒絶。だが、パーネルは裁判では自己弁護しない決意を語る。不倫を否定し勝訴すれば離婚は成立せず、ケイトと結婚できないというジレンマにあるからだ。3場は1890年11月24日、離婚判決後1週間の下院の控え室。ハーコート議員とモーリー議員がグラッドストーン首相に面会し、パーネル宛ての党首辞任要求書簡の是非について相談する。パーネルの議長再選の知らせを聞いて、書簡を報道機関に送りつける決断を固める。4場は1890年12月6日の第15委員会室。議長パーネルとパーネル派議員が、反対派から出された議長解任決議案に激しく抵抗し、両陣営で白熱した議論の応酬が繰り広げられるが、マカーシー副議長が反対派に退席を呼び掛け、党が分裂する。

3幕1場は翌日7日のブライトンのケイトの家。往診の医者には、ケイトはパーネルの診察も依頼し、医者は静養を勧める。応援演説に行く予定だった候補者ヘネシーが他党へ変節したという報が届く。2場は12月10日、鉄道駅。反パーネル派の男パワーが辞任要求書を直に読み上げてパーネルに手渡すが、パーネルはこれを破り捨て、支援を呼び掛ける大演説を行う。3場は1891年6月25日、ブライトンのケイトの家。離婚後半年の法定期間が経過し、パーネルとケイトは晴れて婚礼を済ませる。アメリカの女性記者の取材に快く応じ、ようやく幸福を見つけた、と答えるパーネル。4場は7月1日の鉄道駅。党の命運を賭けたカーロウ (Carlow) 選挙区での選挙でダブルスコア以上の大敗を喫し、悄然とする支持者。一方、反パーネル派は意気軒昂にパーネルに痛罵を浴びせ、列車に乗り込む。遅れてパーネルと側近のグレームが駅舎に現れるが、呆然自失のてい。5場は10月6日のブライトンのケイトの家。病床に伏せるパーネルをグレームが見舞う。パーネルは自分のウィックロウ州のエイヴォンデイルの屋敷が自分の死後、ケイトの財産となるように遺言書の変更を依頼する。嵐の吹

き荒れる中、「とても疲れた。キスしておくれ、ちょっと眠るから」という言葉を最後にパーネルが息を引き取り、幕。

標題『エイヴォンデイルのパーネル』が意味するのは、妻への相続に心を砕くような情愛の深い夫としてのパーネル像である。パーネルが自宅では『不思議の国のアリス』を読んでいた(35)、演説でシェイクスピアの名前を度忘れしたときなど、単に「詩人」と言及した(36)というくぐり、凡人離れした超越的な人柄を描いていて興味深い。もちろん、公人として政治家としての彼の言動も魅力的に描かれており、とりわけ2幕4場の下院の第15委員会室の場面では、副議長のマカーシー以下8名の議員が退席、議長パーネルを含む残された5人で党首継続の決議を取りつける。史実では反パーネル派議員45名、パーネル支持者26名だったが、ほぼその比率(反対率63%)に忠実な登場人物比率(61%)を配して的確に再現していることも付記しておこう。

(3) ショフラーの『パーネル』(3幕全8場)

次にショフラーの『パーネル』を検討しよう。初演は1935年11月11日ニュー・ヨーク。同年の映画版³⁷⁾はこの舞台を基にしているという。イギリス初演は1936年4月23日、ロンドンの Villiers Street のゲイト劇場³⁸⁾スタジオ(The Gate Theatre Studio)、アイルランド初演は1937年3月1日、ダブリンのトーチ劇場。

1幕1場は1880年4月、エルサムのカサリン・オシェイの家の居間。フィアロンの『エイヴォンデイルのパーネル』と同様に、ウィリアム・オシェイ大尉とオゴーマン・マーンがともにクレア州選挙区で当選したことを報じる新聞をケイティ(カサリン)とキャロライン叔母(Aunt Caroline)が読む。浮気癖の夫とは疎遠だが、妻への暴行が伴わないと離婚成立要件に達しないらしい。やがて遠い従姉妹にあたるブリジット・ブレア(Mrs. Bridget Blair)、続いてカサリンの姉アナが訪ねてくる。アナとキャロライン叔母とは不仲である。やがて当選した二人の男達も姿を現すが、狙いはもちろん二人分の選挙資金の返済に必要な2千ポンドの金だった。90歳を越えた金持ちのベン叔母さん(Aunt Ben)へ無心して調達することをオシェイはカサリンに懇願する。オゴーマン・マーンが若い頃崇拜していた女性が偶然にもこのキャロライン叔母と知り、彼は追憶に耽る。一方、ブリジットの方は、実はオシェイ大尉の浮気相手であり、狂おしく密会の約束を取り付ける。オシェイ大尉は同時に、妻カサリンの美貌の魅力を利用して党首パーネルの愛顧を得ようと考え、パーティにパーネルを招待するように要請する。

2場はその数週間後の下院第15委員会室。ヒーリー(Timothy Healy)とマーフィ(Thomas Murphy)が党員名簿を読み上げ、パーネルによる人物評価を別名簿に転記

する作業中。しかしオシェイ大尉に関してはパーネルはなんのコメントも記していない。ダヴィット (Michael Davitt) が現れ、議場では退場覚悟で動議を乱発する戦術が進行中と興奮。やがてキャサリン・オシェイが面会に来る。正式にはこの時が初対面だが、パーネルはかつて芳しい白バラをつけた彼女の姿に一目惚れしており、巧みに言い寄るがキャサリンはその場を辞する。

3場は、次の水曜日のキャサリン・オシェイの家の居間。パーネルを招待した宴が開かれている。パーネルの執心は変わらず激しく、オシェイの策略でも構わない、愛していると熱烈にキャサリンを口説き落とす。

2幕1場は1886年3月、やはりキャサリン・オシェイの家の居間。パーネルは馬や秘書も屋敷に泊めるほどキャサリン家に住み着いてしまっている。姉のアナにはそのことが家名を汚す破廉恥な行為で道徳上許しがたいと、家を出ていく。やがて登場したパーネルはキャサリンに‘Queenie!’と呼び掛け、彼女も‘Husband!’と応じる。いまや念頭には自治とケイティの2つしかないと語り、キャサリンの「かけがえのない助力」のお陰でグラッドストーンの意向を自治へと動かしたと賞賛し、自治を得たら二人で南国に休暇の旅をしよう甘い相談。ダヴィットが駆けつけ、不明朗なオシェイ支持をやめるように進言、パーネルも今後一切、支援しないことを確約する。やがて当のオシェイが現れ、ゴールウェイ選出議員としての再選だけでは満足できず、アイルランド担当大臣 (Chief Secretary for Ireland) として入閣するのが野望であり、パーネルの影響力は失せたと捨て台詞を残す。オシェイの行動に不安を感じ、恋の破局を心配するキャサリンは、一刻も早く自治法案の通過を促そうとグラッドストーン宛て書簡を口述筆記しようとするが、パーネルは言いよどむ。

2場は数か月後の同じ場所。オシェイが先に来ており、キャロライン叔母と離婚訴訟の話になる。キャサリンは、逆に夫オシェイと人妻ブリジットの不倫を暴露して訴訟を泥仕合に持ち込む、と威嚇しているので、ブリジット、さらには姉アナも抗議に訪れる。しかしキャサリンの決意は堅く、しかも裁判では自らの不倫を認めるつもりだと告白すると、二人は呆れ果てて帰る。さらに、キャサリンとキャロライン叔母は、パーネルの政治生命を守るべく訴訟を取下げさせようと団結し、オシェイとブリジットとの不倫を立証する有力な女中証言が得られること、妻の不倫を黙認していた証拠となるメモ書きの断片があること、取下げ補償金として2万ポンド提供することを挙げ、オシェイを脅迫する。しかし戻ってきたパーネルは、訴訟に勝訴することはキャサリンがオシェイの妻であり続けることを意味し、敗訴こそが望ましい、この世で一番大事なものは君だからだ、と語る。

3幕1場は1890年の11月のある午後、カールトン・ガーデンズのグラッドストーン

自由党（この当時、野党）党首の書斎。ヒーリーが面会にくる。公党間の約束だった自治を守る意思があるかを確認にくるが、グラッドストーンは道徳上の理由を挙げてパーネルの辞任を前提とすると答える。続いてキャサリンとキャロライン叔母が面会にくる。キャサリンが、パーネル辞任後、次期選挙の第1公約としてアイルランド自治を本当に追求するか、と詰問すると、黙して答えない。また自分が情婦であると認識し、かつ黙認していたことは、パーネルに会いにキャサリン邸を訪ねた事実からも明白であり、いまになって道徳を持ち出すのはおかしい、と詰め寄るものの、甲斐なく二人は引き下がる。ヒーリーがレドモンドを連れて再び面会に来るが、グラッドストーンは待たせておく。

2場は同日夕方の下院第15委員会室(史実より1ヶ月も早い設定)。キャサリンがグラッドストーンとの面会結果を秘書のモンティに伝える。議員たちが参集し、パーネルも登場。辞任するのに吝かではないが、辞任後にグラッドストーンが自治を公約に掲げて選挙に臨むという確約は、ヒーリー、レドモンドに与えられなかった以上、党の分裂を阻止するには、満場一致で党首継続を承認するか、私を暗殺するかのどちらかだ、とまで力説するが、ヒーリー、オゴーマン、数名の指導者がパーネルを見限って退席する。そして腹心のダヴィットまでがゆっくりと扉に向かうのを見て、パーネルはよろめき、脇腹を押さえる。発作に襲われた彼はキャサリンの家へと向かい、ダヴィットが後を追う。

3場は同日夜のキャサリン・オシェイの家の居間。パーネルがマーフィやダヴィットに介護されて帰宅。ダヴィットやグラッドストーンの変節を愚痴る。やがて「キスしておくれ」を最後にキャサリンの腕の中で息を引き取る。ダヴィットの、我われみんなが彼を殺したのだ、で幕。

以上から推察されるように、ショフラーの『パーネル』は総じてメロドラマ的である。オシェイの不倫相手の女性まで登場してキャサリンの目を欺く、ダブル不倫を舞台にあげ、パーネルも一途な愛に狂う男の側面が強調されて、国務を投げ出した政治家の印象を免れない。キャサリンとグラッドストーンの個人的な関係も前面に押し出されている。第15委員会室の場面ではパーネル擁護派はレドモンド、マーフィ、モンティの3人、退場者が少なくとも5人(ダヴィットを含めると6人)で、ここでもほぼ6割の比率は守られている。

(4) フランク・オコナーとヒュー・ハント共作戯曲『モーゼの岩』

1938年2月28日アビー劇場で初演。全幕を通して舞台は、コーク州のオリアリー家の食堂奥の部屋。

第1幕は1890年12月。オリアリー家の食堂では宴たけなわの様様。この家の主ケイディ (Cady O'Leary) の毫碌した母親シュボーン (Shuvaun O'Leary), 近所に住む中年女ビディ・ラリー (Bidly Lally) とソリー・オサリヴァン (Sorry O'Sullivan) が縫い物をしながら座っている。少しだけあけたドア越しに、食堂の歓声もれ、3人は中の様子を盗み聞きする。宴会は、2年近く獄中であつた青年ヘガティ (Ned Hegarty) の釈放祝賀会で、主人のケイディの挨拶、ヘガティの答礼の挨拶が聞こえてくる。しかし、そこへケイディの妹ケイトがやってきてドアを閉める。かつて恋人に捨てられ未婚のケイトは、人妻との不倫を働いた政治家パーネルを忌み嫌っている。ケイトとビディの口論を聞きつけて、食堂から一人娘のジョウン (Joan) が出てくる。女たちはジョウンとヘガティは似合いのカップルとおだてて、退散する。そこへ女中ネリー (Nellie) が、愛人のイギリス人将校が訪ねてきて、いま押入れに隠れている、と告げ、二人は慌てて将校のもとへ行く。やがて食堂からヘガティと幼馴染みの親友コフラン (Jer Coghlan) が出てくる。ヘガティはジョウンが好きで結婚を申し込もうと考えていたが、コフランも同様の感情を抱いていることを彼の妹から側聞し、真意を確かめる。裁判で世話になった弁護士の親友を慮って、しばらく二人ともジョウンとの関係は棚上げするという提案をヘガティは申し出る。やがて主人ケイディと医者ジャクソン (Dr. Corney Jackson) も食堂から出てくる。ジャクソンは進化論と自由主義を信奉する冷笑家で、パーネル失脚を予言するが、熱烈なパーネル派のヘガティとコフランは反論する。ケイディはヘガティと二人きりで話をし、娘ジョウンとの婚約発表を今日中にしたいと切り出すが、ヘガティは先の事情を説明して保留を申し出る。ケイディは当然、不快感を示し、ジョウンに経緯を説明する。やがて父親が退室すると、ジョウンは女中に命じてイギリス人将校フォーテスキュー中尉 (Lieutenant Grant Fortescue) を呼び寄せる。ジョウンが毎日のように獄中のヘガティに面会に訪れたのは、実はこの将校に会うためであつたが、彼が出所したいま、情熱にかられた中尉は結婚の申し込みに来たのだった。中尉が部屋を出ようとした瞬間に、ジャクソン医師が入ってきて、二人の関係がばれてしまう。名付け親であるジャクソンは娘の今後を憂慮して、監視役の女親の存在が必要だと判断、ケイディの妹(娘の叔母)ケイトに同居してくれるよう頼むことを提案する。ケイトはその依頼を、弟たちとはそりが合わないので無理だと拒絶する。そのとき、戸外から群衆の喧騒が聞こえ、ケイディが、パーネルの党が分裂したニュースを伝える。ヘガティとコフランは、たとえば党が割れようともアイルランド民衆がパーネルを見捨てるはずがない、と憤る。意外にも、パーネル失脚を知って涙ぐんだケイトは、一転して医師の同居提案を受け入れる。騒ぎを聞いたジョウンは、党の分裂と知って、「それだけのこと? なあんだ、て

つきり、大変なことかと思ったのに」と叫んで、幕。

第2幕は1891年の夏の夕方。編み物中のケイトのもとヘジョウンが帰宅。彼女は家事も勤勉、教会にも熱心に通い込んでいる。そこへ、女中の制止を振り切ってフォーテスキュー中尉が登場。なぜプロポーズを拒絶するのか、自分の欠点は何なのかと迫るが、ケイトの断固たる態度に会い、退出。ジョウンは叔母に、コフランからもプロポーズされたことを告白、今夜、一緒にオペラ見物のデートの予定。このように半年の間に状況は大きく様変わりしており、コフランは反パーネル派の教会側に変節し、ヘガティとの関係も疎遠になっている。ケイディは、娘の結婚相手としてヘガティからコフランへの鞍替えを勧める始末。やがて今夜のパーネルの集會に誘いに、ヘガティとジャクソン医師が来訪。ジャクソンは皮肉な悲観論者の姿勢は崩さないものの、パーネルの党に入党、無料で貧困者の診療に応じるなど庶民派の医者である。一方、コフランのプロポーズの件を初めて知ったヘガティはショックを受ける。やがてそのコフランが登場。ジャクソン医師をコフラン家の主治医とするのを止めたことを詫び、ヘガティに対しては、政治状況が一変した以上は、現実的哲学に立脚することが肝要、ジョウンとの結婚後も君との友情を維持したい、と居直る。ヘガティはこれを拒否し、彼もまた張り合うようにジョウンへプロポーズする。その身勝手な自己犠牲の偽善ぶりに腹を立てたジョウンは、どちらとも結婚するつもりはない、と宣言、ヘガティは出て行く。残されたコフランはジョウンに、イギリス人将校との秘密交際を父親に暴露する、そうなれば親が嘆くばかりか君の評判もがた落ちだ、と脅迫、またその将校は「パーネルのように」社交界の、ある人妻と密通した札付きの女たらしで、事件はなんとか示談で揉み消され、ほとぼりが冷めるまでアイルランドへ送られてきたのだ、と知らせる。（この情報の真偽は定かでない。）それを聞いて、ジョウンはコフランとの結婚を絶望的に決意する。パーネル集會に出かけようとしていたジャクソン医師とケイディは、二人の婚約を聞かされ、父親ケイディは大喜びして、出かける。ケイトとシュボーンが登場。戦死した夫を歌う18世紀の哀歌「アート・オリアリーのための哀歌」をシュボーンがしみじみと歌うと、暗闇にいたジョウンはそっと姿を消す。

第3幕は、1891年10月12日の夕方。パーネルの葬儀の翌日。婚礼を明朝に控えながら、ジョウンは荷造りに気乗りがしない様子で、ケイトは急ぎ立てる。茶呑み仲間のビディとソリーが口論しながら登場。ソリーは死んだパーネルの悪口を言い、ビディが反論する。女中ネリーが、英軍の駐屯連隊が今日、インドに派遣されることを伝える。兵隊の楽隊が聞こえ、窓からジョウン、ケイト、ネリーが行進を見送るが、フォーテスキュー中尉の姿は確認できない。やがてヘガティが興奮して登場。彼とジャクソン医師はダブリンまでパーネルの葬儀に参列に出かけていたのだが、帰路、駅で待

ち伏せていたコフランの用心棒連中に棒で襲撃され、ジャクソンが負傷したことを速報に來たのだった。変わらぬ愛をヘガティは伝えるが、ジョウンは自分は相応しくないと断る。やがて、殴られたジャクソンが到着。家の付近に不審な人物がいたというので、ケイディとヘガティは監視に出ていく。コフランがかけつけて、今回の暴行事件は決して自分の差しがねではないと弁明するが、どうやらヘガティを狙っていたことも示唆する。さらに、コフランはケイディに選挙での立候補を要請する。これはパーネル派の対立候補となるヘガティを追い落とすための策謀であり、教会の後盾があるので当選確実、祖国アイルランドのためだ、と煽てられてケイディもその気になる。その後、面会したジョウンはコフランの卑劣さを激しい口調でなじり、二人は喧嘩して別れる。入れ違いに入ってきたケイトは、イギリス将校が別室で待っていると伝える。ケイトとの対話を通して、将校との駆落ちを望む自分の本心をジョウンはようやく悟り、ケイトはこれを支援する。戻ってきたジャクソンは、10歳若ければジョウンを略奪結婚してみせるのだがね、と意外な発言をするが、ケイディは一笑に付す。しかし、これはジャクソンの偽らざる純粋な告白であり、ケイトは早計に駆落ちを許したことを後悔する。しかし時すでに遅く、ドアが閉まる音が聞こえ、ジョウンは将校と逃避行に出たらしい。あわててジャクソンは後を追う。立候補演説の草稿を早速に練るケイディの日和見をケイトは非難し、ジョウンがいない以上、同居の理由もないとしてこの家を出ていくことを告げる。「幸福を見つけに出かけます」というジョウンからの伝言を女中ネリーが届ける。「若くて美しいものはみな、カモメが暗闇に飛び立つようにアイルランドを去って行く。今夜から先、わたしたちはあわれな分裂した国民になるのね」というケイトの言葉で、幕。

フィアロンとショフラーの劇が、およそ10年間のパーネルの晩年を描いていたのに対して、『モーゼの岩』は党の分裂から葬儀までのもっとも重要な時期に焦点を絞って、このわずか10か月間のめまぐるしいアイルランド社会の動き、人々の態度の豹変ぶりを追っている。パーネル自身は舞台には登場せず、彼をめぐる様々な立場の人々の言動を丹念に描くことで間接的にパーネルを表現しているのは『失われた指導者』に近い手法である。興味深いのは、パーネル支持から変節したコフランやケイディ、あるいはソリーだけでなく、失墜前は敵意を示していたケイトやジャクソンが、判官鼻臍とでもいうのか、失墜後に逆に共感を示す変化を対照的に表現していることである。もちろん変節することなく終始一貫してパーネルを信奉するヘガティやビディ、あるいはネリーのような、「岩のごとき」存在も忘れてはならない。

標題の『モーゼの岩』は1幕早々のヘガティの答礼挨拶のなかの「幾多の試練のなかで我々は一つの確固たる信念、すなわち、我々の信仰は岩の上に立てられていると

いう信念に支えられてきました。その岩に対しては、敵の力や欺瞞はむなしく崩れるのです(50)、さらにはコフランの「我々は岩のような人民を擁しているのです」(57)という形で出てくる。これは聖書の『マタイ伝』7章24-27節にある、しっかりとした信仰は岩の上に立てられた家、脆い信仰は砂の上に立てられた家という比喩に由来する。

すでに指摘したように、ビディの台詞「チーフは死んでないわ！戻ってくる、戻ってきてあんたの言った言葉を取り消させるわ」「埋められたのは彼ではなかったのよ。イギリス人たちが彼を破滅させようとしていたから、ただそう見せかけただけ。」「私は(死んだことを)絶対に信じない」(93)は、パーネル復活を祈る民衆の声の代弁であろう。

IV おわりに

1918年初演のロビンソンの『失われた指導者』と、1930年代半ばの他のパーネル劇3作品などを見てきたが、やはり時代に強く制約されている印象を受ける。パーネルがもし死なずに今も生きていれば、という想定は、1918年では〈パーネル=71歳〉であり、この復活伝説が現実味を帯びるぎりぎり限界のところであろう。フィアロンやショフラー劇の30年代になると、たとえ生きていても90歳近い高齢であり、力強い弁舌や指導力を期待することはかなわない。両者が復活願望の劇ではなく、等身大の評伝としてパーネル個人の私生活に焦点を当てたのも、あるいはオコナーたちが初演の時点を描く代わりに、過去の歴史的事象として扱ったのも、時代の制約によるところが大きいだろう。1916年の復活祭蜂起の挫折を経て内乱に突入する直前の、混沌とした政治情勢にあった1918年と、とりあえずの自治を1922年の自由国樹立で達成していた30年代とでは、指導者待望の程度に温度差があったのもやむを得ないことかも知れない。

(本稿は1999年12月5日、東京・成城大学で開催された日本アイルランド協会'99年次大会第2日で行った研究発表の準備草稿として作成されたものである。)

注

テキストは、Lennox Robinson, *The Lost Leader* (Belfast: H.R.Carter Publications, 1954) を使用。Irish Drama Selections 1として刊行されたロビンソン劇普及版の選集には6作品を収めるものの、*The Lost Leader* は除外されている。

1) 1934年の初演当時の原題は『人生生きるに値するや』(*Is Life Worth Living?*) で、海辺の村に夏の巡

業公演に來た高踏派の劇団が演ずる深刻な劇の影響で、人々が罪悪感にとらわれる姿を描いたもの。喜劇に代えて外国の深刻な問題劇をアビー劇場やダブリン演劇連盟で推奨したロビンソン自身の営みを戯画化したともいえる。

- 2) 拙著『現代アイルランド文学序論』(近代文藝社, 1995年), p.242.
- 3) 主として Bernice Schrank and William W. Demastes, *Irish Playwrights, 1880-1995: A Research and Production Sourcebook* (London: Greenwood Press, 1997) の記述による。
- 4) これは事実で、1851年11月6日に就任、10月1日に溯って20ドルの月給が支払われた。[Michael Meyer, *Henrik Ibsen: The Making of a Dramatist 1828-1864* (London: Rupert Hart-Davis, 1967), p.102.]
年譜によれば、この時までにはイブセンが書いた戯曲は『カティリーナ』、『勇士の塚』、『ノルマ』、または政治家の恋』の3編だったようで、この点でもロビンソンと共通している。[原 千代海訳『原典によるイブセン戯曲全集 第5巻』(未来社, 1989年), pp.523-4]
- 5) ロビンソンの芝居でわが国で最も有名なものは、この作品かもしれない。というのは、これは松居松翁著の翻案劇『茶を作る家』として上演されたからである。(初出1913(大正2)年10月『演芸画報』, 初演も河合武雄の公衆劇団により帝国劇場で同月)。配役はお花(河合武雄)、博造(小織桂一郎)、三代子(英太郎)、友右衛門(松本要次郎)など。なお復刻版をみると、著者名が「大久保二八子」となっているのは本名表示であろうか。以下、参考までに『茶を作る家』の粗筋を引用しよう。
二幕。宇治で代々続いた茶師の名家春日井家の当主友右衛門には5人の子があったが、二男友次郎はアメリカへ、三男春男は九州の実業界、四男博造は教育界、娘のお花は東京にあり、今は長男守之助とて家を支えている。しかし事業は不振で、茶園は借金の抵当に入り、返済期限は迫っていた。そこへ7年振りでお花が帰郷、博造も教育者の妻の三千子と共に家へ帰ってくる。博造の目的は名古屋で女学校を建設するその資金を得るにあったが、折から家の焙炉場での火災が保険金目あての父の放火と知り、これを父の粗相火として保険金を受けず、借金の返済には名古屋の家を売り、田園生活に憧れる三千子と共に茶園に働くこととする。しかし馴れぬ島仕事が続く筈もなく、二人は名古屋の教育界への復帰を考えるが、父や兄が茶師の仕事の続けるための資金に悩む。そこへお花が友次郎の送金だといって二千円の金を差し出す。不審に思った博造が問いつめると、お花はじつは東京では新橋で芸妓をしていて、その生活に嫌気がさし家に帰ったのだが、家を救うためもう一度苦世に沈む決意をしたものだった。真実を知らぬ父と兄は友次郎に感謝し、東京へ去るお花を薄情者と罵倒する。外国劇の翻案であるが、見事な社会世相劇となっている。(菊池明)三好行雄ほか編『日本現代文学大事典 作品篇』(明治書院, 1994年), p.593.
- 6) エドワード7世崩御の報は早朝にダブリンに届いており、市内の他の劇場は逸早く閉鎖を決めた。この日はあいにく土曜日とあって^{マチネ}昼公演と夜公演の2回が予定されており、イエイツは国外、グレゴリー夫人はアイルランド西部にいたので、朝のうちに夫人に電報を打ち、返信を待ったが、来なかった。ロビンソンは英国王の死去と国民劇場は無縁と考え、役者たちもこれに同意したため、パードリック・コラム(Padraig Colum, 1881-1972)の『トマス・マスケリー』の昼公演を開始した。ところが、その終演間際になってグレゴリー夫人から「儀礼上、閉鎖すべし」の電報。昼やって夜やらないのは優柔不断と判断した彼は、夜公演も強行した。グレゴリー夫人は返事の電報を、待たせておいた配達人にすぐ渡しており、普通ならば昼のうちに配達されてしかるべきだったのになぜ遅れたのか分からない、という。[Lennox Robinson, *Curtain Up: an autobiography* (London: Michael Joseph Ltd., 1942), pp.31-32.]
- 7) ホーニマンはクエイカー教徒で富裕な紅茶商人の娘に生まれ、10代から演劇熱にあふれ演劇学校卒業後、ドイツなどにもでかけたが、1903年アイルランドに來た。1904年のアビー劇場建設のスポンサーであり、1908年にはマンチェスターのゲイアティ劇場(the Gaiety Theatre)を買収し、英国初のカトリック的

レポートリーの劇場として、100本以上の新作を1917年経営難で挫折するまで上演した。

- 8) 菊池寛・山本修二『英国・愛蘭近代劇精髄』(新潮社, 1925年)では『失はれた首謀者』(247), 尾島庄太郎『現代アイアランド文学研究』(北星堂, 1956/60年)では『救われぬ領袖』(275), 尾島庄太郎・鈴木弘『アイアランド文学史』(北星堂, 1977/80年)ならびに前波清一氏の研究書(88年)では『消えた指導者』(90), アイアランド演劇関係の邦訳書『アイアランドの演劇』(富岡書房, 1989年)では, 訳者の久保田重芳先生が『救われぬ指導者』というそれぞれ訳語を与えている(224-5)。〈首謀者〉は「中心になって悪事・陰謀を企てる人, 張本人」(広辞苑), つまり否定的な‘ringleader’であり, 〈領袖〉は時代がかつた語感があり, 〈消えた〉では「失踪・蒸発・夜逃げ」のイメージがするので避け, 結局は直訳しておいたが, その是非については本文を参照。
- 9) この劇の初演の7年前(1911年)にフロイトの「自伝的に記述されたパラノイア(シュレーパー議長)の1症例に関する精神分析的考察」が出ている。[R.シエマ編『精神分析事典』(弘文堂, 1995年), p.358.]
- 10) これを〈幻聴〉と解釈すれば, 妄想と頻繁な幻聴に特徴づけられるものの, 思考や会話の不統合が顕著でない点で, まさに「妄想型分裂病」(paranoid Schizophrenia)の定義を満たす[『心理学辞典』(有斐閣, 1999年), p.836.]。ノートルダム清心女子大学の清板芳子先生のご教示によれば, ルーシアスの症例は「精神分裂症の要素を基盤とする妄想型の精神疾患」で, 「自己拡大型の誇大妄想」という。とくに妄想だけの場合, パラノイアと診断される場合もある。他の日常生活にほとんど支障をきたすことがなく, 40-50代の中老年の発病が多い。また, 催眠療法には行動療法と分析催眠があり, 前者は夜尿症や頻尿, 赤面症など, 緊張感がストレスとなって引き起こされた自律神経失調をリラックスさせることで回復させるときに用いられ, 一過性の側面もあるが, ある程度は安定させることができる。後者は, 劇中でパウエル・ハーパー医師が行ったいわゆる精神分析の手法で, トラウマに直面させ, 抑圧の皮をはいでいく。自由連想や言語連想, 夢分析など, 催眠によって幼児期まで年齢退行させる。極端な場合には, 自動筆記や前世回想にまで進展することもある。一般に妄想の治療には薬物投与が有効で, 神経伝達物質(ドーパミン)を左右する安定剤が使用される。妄想はいわば発熱と同じ状態であるから, 妄想の内容を根掘り葉掘り詮索して患者の話に合わせて乗ってしまったり, 論理的に反論や説得を試みると, かえって妄想が膨らみ, 強固になって症状を悪化させるので避けねばならないという。劇中, とくに第3幕では, この避けるべき行動を周囲の人物が一斉に行っており, ルーシアスの妄想を強固にしてしまったのかも知れない。「妄想消失後に, あの妄想はまちがっていたという病識をもつと同時に, 希死念慮を訴える患者も多い」[『心理臨床大事典』(培風館, 1992年), p.860.]とされることを考えれば, 3幕でルーシアスが「ここで私の人生は終わるような気がする」(55)と予言めいた言葉を発しているのは, 最後の彼の事故死が自殺の無意識的意図を孕んでいたことも示唆する。
- 11) 主人公の名前ルーシアスは, 女性形のルシア(Lucia)ほど一般的ではなく, アメリカ以外には余り使われない名前とされるが, ラテン語起源で「光」(lux)を意味することは重要である。Patrick Hanks and Flavia Hodges, *A Dictionary of First Names* (Oxford:Oxford University Press, 1990/92), p.213.
- とくに劇の最後のこの場面で, 彼の表情がランプの「光」に照らし出されることは, 本来であれば, 植民地支配の暗闇を照らし, アイアランドの人々に希望を与える「曙光」として輝く使命を果たせた人物かもしれないことを強く暗示する演出であろう。なお, 新約聖書には2人のユダヤ人キリスト信者ルーシアスの名前が登場する。『使徒行伝』(Acts)13章1節にはクレネ(アフリカ北部の古代都市)の預言者として(There were in the church at Antioch certain prophets and teachers: Barnabas, Simeon called Niger, Lucius of Cyrene, Manaen, a close friend of Prince Herod, and Saul.), また『ロマ書』(Romans)16章21節では古代ギリシャのコリントに住む, パウロの友人がそれである。(Greetings to you

- from my colleague Timothy, and from Lucius, Jason, and Sosipater my fellow-countrymen.) *The Revised English Bible*, Oxford UP and Cambridge UP, 1989.
- 12) Roma A. King, Jr. (ed.), *The Complete Works of Robert Browning* Vol.V (Athens, Ohio: Ohio University Press, 1981), pp.261-71.
- 13) Louis Untermeyer (ed.), *A Treasury of Great Poems* (New York: Galahad Books, 1993), p.860.
- 14) Roma A. King, Jr. (ed.), *The Complete Works of Robert Browning*, pp. 283-4.
- 15) *A Treasury of Great Poems*, p. 859.
- 16) 曾根 保『ブラウニング夫妻』(英米文学評伝叢書49)(研究社, 1939年), p.96.
- 17) Roma A. King, Jr. (ed.), *The Complete Works of Robert Browning* Vol.IV (Athens, Ohio: Ohio University Press, 1973), pp.183-4.
- 18) *The Letters of W.B. Yeats*, (London: Lupert Hart-Davis, 1954), p.635.
- 19) 前波清一『イエイツとアイルランド演劇』(風間書房, 1997年), pp.88-9.
- 20) *Curtain Up*, p.130.
- 21) St. John Ervine, *Parnell* (New York: Penguin Books, 1944), pp.233-4.
- 22) 南ア戦争は、イギリス人とブール人(=ボーア人; オランダ人入植者の子孫)の間での植民地再分割をめぐる戦争で、1880年(第1次)、1900年(第2次)の2度行われた。1852年に建国されイギリスも承認していたトランスヴァール(Transvaal)は、当時世界最大の金の産出国であり、イギリス植民地相ヘンリ・カーナヴァンはこれを1877年に併合した。1880年10月、併合に反対するブール人が武装蜂起し、独立を回復した。4万のブール軍に1万5千のイギリス軍は不利な戦いを強いられたが、やがて勢力を増強し、1900年には再びイギリスがトランスヴァールに侵攻し、首都プレストリアを占領、同盟国だったオレンジ自由国とともに植民地にしたもの。デヴェット将軍(Christian De Wet, 1854-1922)はこの2つの戦争で功績をあげ、のちに歴史書『3年戦争』も書いている。1907年にはオレンジ川植民地(the Orange River Colony)の農相、1914年にはアフリカーナーの蜂起に加わり、捕虜となって懲役6年を宣告されたが、1915年に釈放された。[*Chambers Biographical Dictionary*(New York: Chambers, 1990), p.414.]肖像画を比較すると、デヴェット将軍は顎鬚、頬鬚、口鬚を生やしている点は共通するが、骨相学的にはパーネルと似た風貌とは言いがたい。いずれにしても、デヴェット=パーネル説は1900年の第2次南ア戦争の時に流布したらしい。パーネルの死後9年のころだから、8歳若いデヴェット将軍はちょうど晩年のパーネルと同じ45歳くらいだったことになる。cf. Christiaan Rudulf De Wet, *Three Year War: October 1889- June 1902* (London: Constable, 1902); Deneys Reitz, *Commando, a Boer Journal of the Boer War* (Folio Society, 1982).
- 23) 「ある朝、新聞を開いてみると、と駈者が確信ありげに言った。《パーネル帰国》という記事が載ってるはずだ。なんでも望みのものを賭けていいぜ。そう言えばいつかの晩ダブリン小銃歩兵連隊の兵士が一人この酒場に来て南アフリカでパーネルを見かけたと言ってたよ。(中略)死んでいないよ、彼はまだ。どこかへ亡命しただけさ。運ばれて来た柩のなかには石が詰めてあった。名前をデ・ヴェットと変えて、ボーア人の将軍になってる。」という件が、第16挿話エウマイオスにある。丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳『ユリシーズ III』(集英社, 1997年), pp.275-6.パーネル同様の「鋭い眼と決然たる表情」を捕虜となったダブリン兵は印象にとどめている。Deneys Reitz, p.29.
- 24) Robert Kee, *The Laurel and the Ivy: The Story of Charles Stewart Parnell and Irish Nationalism* (London: Penguin Books, 1993), p.12.
- 25) Katharine Tynan, *Twenty-five Years: Reminiscences* (London: Smith, Elder & Co., 1913), p.350.
- 26) モード・ゴンは1890年1月11日にフランスで男児ジョージを出産したものの、翌年8月31日に髄膜炎で

- 死亡し、失意のどん底にあった。アイルランドに戻る船は偶然にもパーネルの遺骸を運ぶ船であった。葬儀では彼女も流れ星を目撃し、「死から生が、死から永遠の生命が」と書き記す彼女の脳裏には、パーネルよりも幼子の姿があったのだろう。Margaret Ward, *Maud Gonne: A Life* (London: Pandora, 1993), p.32.
- 27) 「彼の棺は大勢の人が立ち並ぶダブリンの街の中を無言で引かれて行ったが、それ以来これほど多くの人が街頭に出たことはない。この棺が墓穴の中に下ろされたとき、夜空を一瞬、流星が横切って消えた。何千人もが、これを目撃している。ある意味では、アイルランド人はパーネルを失ったショックから未だに立ち直れないでいると言っても嘘ではない。」[ユーリック・オコナー『恐ろしい美が生まれている——アイルランド独立運動と殉教者たち』波多野裕造 訳, (青土社, 1997年), p.29.]
- 28) Lady Gregory, *The Collected Plays II: The Tragedies and Tragic-comedies* (Gerrards Cross: Colin Smythe, 1970)
- 29) 前波清一『劇作家グレゴリー夫人』(あぼろん社, 1988年), p.85.
- 30) オスカー・ワイルドの童話『若い王』(“The Young King”)の結末に類似する。
- 31) Lady Gregory, p.304.
- 32) George Brandon Saul, *Seumas O’Kelly* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1971), p.89.
- 33) Malcolm Brown, *The Politics of Irish Literature: From Thomas Davis to W.B. Yeats* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1972), p.380. イスカリオテのユダ (Judas of Iscariot), いわゆる裏切りのユダの生地が Kerioth で、この小説では、キリストは十字架上で死なず、昏睡状態からヨゼフによって助け出され、エッセネ (Essene) 派の村で安息を得ているという設定だという。
- 34) William Robert Fearon, *Parnell of Avondale* (Dublin: The Sign of the Three Candles, 1937)
- 35) Elsie T. Schauffler, *Parnell: A Play in Three Acts* (London: Victor Gollnecz, 1937)
- 36) Frank O’Connor and Hugh Hunt, *Moses’ Rock* (Gerrards Cross, Bucks.: Colin Smythe, 1983)
- 37) 主演を演じたのは名優クラーク・ゲイブル (Clark Gable) だったが、『パーネル』(*Parnell*, 1937) の映画化は大失敗に終わった。彼はパーネルについて無知だったし、顎鬚もつけずに演じるなど、外見も似ていなかったため、説得力に乏しいものになった。(Joseph M. Curran, *Hibernian Green on the Silver Screen: The Irish and American Movies* (New York: Greenwood Press, 1989), p.67. 現在、ビデオ版も入手できない。
- 38) この劇場は1925年10月に Covent Garden にもともと作られたが、1927年に Villiers Street に移転し、あまり人気がなかった。しかし1936年にはこの『パーネル』の他にも、Leslie and Sewell Stoke『オスカー・ワイルド』(*Oscar Wilde*)、リリアン・ヘルマン(Lillian Hellman)の『子どもの時間』(*The Children’s Hour*)を、1939年にはスタインベックの『二十日鼠と人間』(*Of Mice and Men*)を上演した。1941年4月16日、空襲で大きな被害を受け、一時期を除いて閉鎖されたままである。(Phyllis Hartnoll, *The Concise Oxford Companion to the Theatre* (Oxford:Oxford University Press, 1972/86), p.201.